ＩＳ－インフィニット・ストラトス－ 白き死神

朱雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ－インフィニット・ストラトス－　白き死神

【Ｎコード】

Ｎ８９４７Ｕ

【作者名】

朱雀

【あらすじ】

ＩＳ通称〈インフィニット・ストラトス〉

女性にしか扱えない兵器を世界で初めて男で動かした少年、織斑一夏よりも先にＩＳ動かした少年がいた。少年は『白き死神』と供にＩＳ学園に向かう。

プロローグ

「束さんが言っていたのはここのようだな」

俺はドイツにいるテロリストらの秘密基地の上空二〇〇メートルで、『ホワイト　デスサイズヘル』を纏って待機している。

「全く、だんだんテロが減ってはいるが……根絶は難しいな」

俺は三年前から、世界中のテロ組織を潰している。少し前では、テロ活動がそこそこに行われていたが、俺たちが組織を潰しているため、全くないぐらいになった。そして世界には『白き死神』という名が知れ渡り、テロ活動が激減した。

「そろそろ作戦時間だな。行くぜ、ホワイト　デスサイズヘル」

上空から一気に降下して、シャッターをビームシザースで斬り裂き、中に侵入する。

「てっ、敵が侵入。すぐに無人機を出せ！」

男が（声的に）言うと、ハッチが開き、そこから二十機前後の無人機が現れた。

「（あの無人機。やはり亡国機業のやつか）敵を確認。破壊する」

瞬時加速で一機目との間合いを詰めて、ビームシザースで半分に斬り裂く。

「次々きやがれ」

次々と来る無人機を、コアと機能中枢を斬り倒していく。

「これで、ラスト！」

最後の無人機を破壊して周りを見る。すでにテロリスト共は逃げている。まあ、ドイツ軍は優秀だって聞いたし、大丈夫だろう。

「そろそろドイツ軍が来るな」

ハイパーセンサーには、三つの反応が確認された。二機はテロリスト共の確保にでも行っているのだろう。もう一機はこっちに近づいて来ている。さすがに、登録されてないコアと、乗れないはずの男がＩＳを動かしているのがばれたら、国際問題になってしまう。そういうとこもあり、即刻ドイツを出て行った。

『お疲れ、りゅーくん』

「束さん。やっぱりあの無人機、亡国機業のやつでした」

亡国機業が作っている無人機に使われているコアは、擬似コアといって、ＩＳに使われているコアに近いのだ。しかし擬似コアはバリアはあるが絶対防御がない。その代わり、人間では不可能な動きができる。

『そっか～。ね～りゅーくん。ＩＳ学園に行かないかい？』

「は？」

なんで？男がＩＳを動かしたなんてことを世界に広めるようなことをするんだ？

『だってね～。いっくんがＩＳを動かしたんだよ』

「一夏が！？」

―織斑一夏。俺の親友。五年前から一切連絡を取っていない。そうか、あの一夏がＩＳを動かしたのか。

「わかりました。すぐに入学手続きをしておいてください」

『了解だよ～』

さて、一夏がどんな顔をするか楽しみだ。

主人公設定・ＩＳ設定

名前　霧島龍（きりしまりゅう）
身長　１７６ｃｍ
体重　５７キロ
趣味　読書　料理（特にお菓子作り）
好きな物　本
人　友達
食べ物　甘い物

嫌いな人　仲間を傷つける人
食べ物　特になし
容姿　上の上
瞳　紅
髪　白（腰辺りまで伸びている）
専用ＩＳ　『ホワイト　デスサイズヘル』
装備品　イヤリング　ナイフ

五年前の夏休みに元軍人によるテロで両親を失っている。そのときに篠ノ乃束に拾われ、ＩＳ工学を束のもとで学んだ。両親をテロで失ったためにテロ行為に対して激しい憎悪を抱く。龍もコアを作れるが、擬似コアしか作れず、亡国機業が作る擬似コアより性能がいい。三年前に研究の手伝いをしているときに、ＩＳを動かせることがわかり、現在ではテロ活動の根絶のために戦っている。一夏と箒と鈴とは幼馴染である。

ＩＳ設定

機体名　『ホワイト　デスサイズヘル』
世代　第二・五世代
機体イメージ　ガンダムデスサイズヘル（新機動戦記ガンダムＷＥｎｄｌｅｓｓ　Ｗａｌｔｚ）
機体カラー　白
待機状態　イヤリング

三年前にたまたま動かしてしまったＩＳをそのまま改造して、第四世代並みのスペックを持っているが、Ｄ－Ｓｙｓｔｅｍを起動させると、現行ＩＳを凌駕するほどのスペックを持っている。テロ組織を潰しているうちに『白き死神』と呼ばれるようになった。

武装

ビームシザース
ビーム発生器が二基の連装刃タイプのビームサイズ。バーニアも付加されており、振り下ろす力を増したり、回転切りなどに利用される。また、ビームシザースに使われているビームは、雪片と同じくバリアー無効化能力があるが、雪片と同じく燃費が悪く『零落白夜モード』として使われる。『零落白夜モード』の時は、刃の色が赤に変わる（通常時は緑）。

バスターシールド
表面に十字架の装飾があしらわれた左腕に装備される攻防一体のシールド。先端部が展開してビーム刃が発生し、この状態で敵機に向かって射出する。強度は盾殺し（シールド・ピアース）をかろうじて耐えるほど。

アクティブクローク

胴体前後面を覆う外套状（クローク）の追加装甲。ビーム系をぐ無効化することができるフィールドジェネレーターを設置。また、装甲自体にも対ビームコーティングが施されており、それ自体の防御力も高い。弱点は実弾には効果がないことと、許容範囲以上のビームの攻撃力を受けると強制解除される。

ハイパージャマー
全てのセンサーから確実に姿を消すことができる電子戦用装備。一回の使用に大量のエネルギーを消費するが、奇襲などに使える。

Ｄ（デストロイ）－Ｓｙｓｔｅｍ
デスサイズの全リミッターを外すシステムで、特に機動面では世界最速を誇るほどではあるが、当然操縦者には負担が大きすぎて長時間は不可能。
システム起動時、機体が赤く発光する。

1話

ＩＳ学園、
ＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関である、その運営および資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国が理解できる解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。――ＩＳ運用協定『ＩＳ操縦者育成機関について』の項より抜粋。
という学園。それにしても……

「でかいな。まあ、ＩＳ操縦者育成を目的とした教育機関だから当たり前か」

俺がいるのは、ＩＳ学園の正面ゲートの前に立っている。すでに待ち合わせの時間が過ぎているのだが。

「すまない。待たせたな」

学園の方から来たのは、漆黒のスーツを着た千冬さんだった。

「お久しぶりです。千冬さん」

「久しぶりだな龍。あの日から連絡が取れなくて心配したんだぞ」

「すみません」

とりあえず一回頭を下げた。

パアンッ！

「ぐあっ！？」

突然、出席簿で殴られた。しかも角で。

「これで許してやる」

「はい」

「まあ、生きていたからいい。もうＨＲの時間だ。行くぞ『白き死神』」

「はい」

そして俺は千冬さんについて行った。そういえば、箒もこの学園に入学しているって束さんに聞いたな。どんな反応するか楽しみだ。

「私が呼んでから入ってこい」

と言って千冬さんは、一年一組の教室に入って行った。それから、

『げえっ、関羽！？』と何かを三回叩いた音と黄色い声援が響いた。

……ずいぶん騒がしいクラスだな。

『さあ、ＳＨＲは終わりだ。といきたいところだが、まだ紹介が終わってない奴がいる。――霧島。入ってこい』

さて、俺の高校生活の幕開けと逝きますか。

「失礼します」

少々騒がしかった教室が、一気に静かになった。

「霧島龍だ。趣味は読書と料理だ。まあ、よろしく頼む」

「「「……」」」

簡単な自己紹介をしたのだが、返ってきたのは沈黙だった。なにかまずったか？

「きゃ……」

「？」

「「「「きゃあああああーーーー」」」」

突如、黄色い声が教室に響いた。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「かっこいい！守ってほしい系の！」

「地球に生まれて良かった〜〜〜〜！」

元気だな、このクラスの女子は。それにしても、一夏と箒、幽霊を見ているような目で見るな。

「五年ぶりだな、一夏」

「龍……なのか？」

「そうだぞ」

「ゆ、幽霊が出たーーー！！！！！」

馬鹿かこいつは？

ゴンッ！

「いっ――！？」

「これのどこが幽霊だ？」

「いや、冗談だ」

冗談と言っているが絶対本気で言ったな。

「霧島。お前の席は織斑の後ろだ」

「わかりました」

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を

半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

さすが鬼教官。ドイツでも教官をしてたと聞いたけどこんな感じだろうな。

「龍、なんで連絡くれなかったんだ？」

「それに関しては謝る。ちょっと事情があってな。にしても居心地が悪いな」

「同感だ」

しょうがないのだろう。最近までは男がＩＳを動かしたことがなかったのだからな。物珍しさがあるのだろう。

「……ちょっといいか」

「え？」

「ん？」

突然、話しかけられた。女子同士の牽制に競り勝ったのだろうか？……それはないか。今の状況から考えると、一人思い切って行動に

出たようだ。

「……箒？」

「久しぶりだな」

「……」

目の前にいたのは、六年ぶりの再会になる幼なじみだった。

「廊下でいいか？」

「行って来い。一夏」

ちなみに箒は一夏が好きなのは知っている。まあ。一夏が気づくかはわからんが。あいつは唐変木だからな。（主人公も唐変木です）

「早くしろ」

「お、おう」

そして一夏は箒についていった。さて、二時間目開始まで寝ておくか。

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証

が必要であり、枠内を逸脱したＩＳを運用した場合は、刑法によって罰せられ――」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。はっきり言って俺はもう教科書の内容を理解していて、暇なのだ。しかし寝ると後ろから出席簿が飛んでくるから寝られないから、前の席の一夏の様子を見ている。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

一夏の様子がおかしいことに気づいた山田先生が、訊いてきた。

「あ、えっと……」

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

「先生！」

「はい、織斑くん！」

一夏のことだきっと面白いことを言うに違いない！

「ほとんど全部わかりません」

やらかいた！（笑）

「え……ぜ、全部、ですか……？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつった。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

挙手を促す山田先生。

シーン……。

おい、一夏。おかしいな。って顔で見るな。

「……織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

教室の端で控えていた千冬さんが訊いてきた。これも期待できる。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンッ！

「必読と書いていてあっただろうが馬鹿者」

さすが一夏だ。あれを電話帳と間違えて捨てるなんて。

「霧島。お前はどうなんだ？」

「全て暗記しています。なんなら今ここで暗記した内容を言いますが？」

「いや、いい。あいつのもとにいたのなら当然だな。織斑に教えてやってくれないか？」

「わかりました。一週間で覚えさせます」

「頼む」

それを聞いた一夏は口から魂が抜けていたのは余談だ。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「なんだ？」

二時間目の休み時間。一夏に基本的な単語の意味を教えていた。そこに突然声をかけられ、素っ頓狂な声を出す。俺たちに声をかけてきたのは、金髪の地毛で、白人特有の青い瞳がやや吊り上がっている。如何にも『今』の女性の雰囲気だを出している。今の世の中、ＩＳのせいで女性はかなり優遇されている。その優遇は最早行き過ぎていて、女子＝偉いという構図を当たり前としている女性も珍しくない。この手の人間は面倒だ。

「訊いてます？お返事は？」

「訊いている。何のようだ？俺は今忙しいんだ」

俺がそう答えると、目の前の女子はかなりわざとらしく声をあげた。たしか……こいつはイギリスの代表候補生か。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「「……」」

鬱陶しい。としか言いようがない。

ＩＳを使える。それが国家の軍事力になる。だからＩＳ操縦者は偉い。そしてＩＳを動かせるのは原則女しかいない。つまり『女＝偉い』という世界になっている。面倒な世界になったものだ。ＩＳさえなければ父さんと母さんは……。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？この「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生だったな」あら。そちらさんはお知りのようで」

「入学前に少し調べさせてもらった。しかし、記憶するに値しないな」

「な、なんですって！」

そんなことを言われオルコットはさらに声をあげた。

「失せろ。忙しいと言ったはずだ」

「龍、質問いいか？」

「何だ？」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名と、俺がずっこけた。

「い、一夏……代表候補生ってのはな、国家代表ＩＳ操縦者の、候補生として選出される奴らのことだ。単語で想像できるだろ」

「そういわれればそうだ」

「そう！エリートなのですわ！」

びしっと一夏に向けて人差し指が、鼻に当たりそうなくらい近かった。いい加減失せろ。

「本来ならばわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「「そうか。それはラッキーだ」」

あ、一夏はもった。

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんだろうが」

「鬱陶しいから、さっさと失せろ。こいつの勉強時間がなくなる」

せめて、次の授業の内容はある程度教えておきたい。

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一、いえ、今は二人ですか？　どうでもいいですわね。少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、とんだ期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだか」

「まったくだ」

「ふん。まぁでも？私は優秀ですからあなた達のような人間にも優しくしてあげますわよ」

この態度が優しさと聞いたのは、十五年生きてきてはじめて知った。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

ほぉ、教官をねぇ。どうせ手を抜かれていたんだろう。学園の教師陣はあいつ程度で負けるような人たちとは思えん。

「入試って、あれか？ＩＳを動かして闘うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

一夏が言ったことは相当ショックだったのか、目を驚きに見開いている。

「わ、私だけだと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。氷にヒビが走ってような音が聞こえた。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「こ、これが落ち着いていられ――」

キーンコーンカーンコーン。

おお、ちょうどいいタイミングでチャイムがなった。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

まあ来るのか。鬱陶しい。

「龍は入試はどうだったんだ？」

「俺は決着がつかなかったから引き分けになった」

「龍の相手は誰だったんだ？」

「千冬さんだ」

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違って、山田先生ではなく千冬さんが教壇に立っている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬さんが言う。説明によると対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席をしなければならない。しかも一度決まると一年間変更はないらしい。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

あっ、一夏が推薦された。ってか一夏。なに他人事のように考えて

いるんだ？

「私は霧島君を推薦します！」

くそっ、推薦された。あの人のことだ。拒否権はないだろう。

「では候補者は織斑一夏、霧島龍……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

「諦めろ一夏。俺たちに拒否権はない」

「そうだ。他薦された者に拒否権はない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも――」

諦めの悪い一夏が反論を続けようとしたところを、突然甲高い声が遮った。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのは、オルコットだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……鬱陶しい。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

イギリスも島国だろ。日本とさほど大差はないだろ。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

イライラしてきた。ここまで言われるとちょっと癪だ。一夏も動きだしそうだな。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないなこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

カチン。

「だったら、さっさとイギリスに帰れ！貴様がいなくてもまだ替え（スペア）ぐらい数人いるだろ。代表候補生の分際で調子に乗るな！」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「あっ、あっ、あなたたちねえ！わたくしとわたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に俺たちの祖国を侮辱したのは貴様だろ？」

「決闘ですわ！」

バンッと机を叩くオルコット。ふん、こいつをどのように叩きつぶすが考えただけで楽しくなる。

「いいぜ。相手になってやる」

「言っておきますけど、わざと負けたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど俺と一夏は腐ってない」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

さすがに男が本気で女子と力比べをするわけにもいかないし、ハンデでもつけてやるか。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「はあ？俺がどのくらいハンデをつけたらいいか聞いている」

と、そこまで言ってクラスからドッと爆笑が巻き起こった。

「き、霧島くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「二人は、確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

確かに過去の戦闘機・戦車・戦艦はＩＳの前ではただの鉄屑でしかない。

「オルコット、織斑はともかく、霧島にはハンデをつけてもらえ。今のお前では霧島に傷一つつけられない」

「そんな男にハンデをつけてもらうなど、必要ありませんわ」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と霧島とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

ハンデはいらないようだな。だったら、Ｄ－Ｓｙｓｔｅｍを使って格の違いを見せ付けてやるか。

2話

「一夏ぁー。大丈夫か？」

「……」

「返事がない。ただの屍のようだ。ご臨終」

放課後、俺の目の前には一夏と言う屍が倒れていた。

「勝手に殺すな……」

あ、なんだ。生きていたのか。

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしんだ……？」

「苦情は俺ではなく、束さんに言ってくれ」

休み時間も変わらず。また女子が他学年・他クラスから押しかけ、きゃいきゃいと小声で話し合っている。

（勘弁してほしい……）

昼休みも、俺たちが学食に移動するとゾロゾロと全員がついてくるのだ。どこぞの大名行列だ。しかも学食ではモーゼの海割りでちょっとしたガリバー状態だった。

「ああ、織斑くんと霧島くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「「はい？」」

呼ばれて顔を上げると、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「えっとですね、寮の部屋が決りました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

そう、ここＩＳ学園は全寮制で、将来有望なＩＳ操縦者たちを保護する目的もあるらしい。確かにどこの国も優秀な操縦者の勧誘に必死だ。

「俺の部屋、決まってないんじゃなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど。龍は？」

「俺もなんですけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。二人はそのあたりのことって政府から聞いてます？」

なるほど。賢明な判断だ。確かに一夏は前例ねない『男のＩＳ操縦者』だからな。

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入るのを優先したみたいです。織斑くんは一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらく相部屋で我慢してください」

「部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できな

いですし、今日はもう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら――」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

ああ、ダースベイダーの曲が流れていた。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう。それと霧島。あいつから荷物が着いたぞ」

よかった。束さん、ちゃんと届けてくれたんだ。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、二人は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

馬鹿か？こいつは。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

いまさら気付いたか。

「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

普通に考えてダメだろ。

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような……」

ダメだ。完全に暴走し始めた。

しかも、向こうは向こうで俗に言う『婦女子談義』とやらが花咲いていた。

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら……？」

「霧島くんもそうなのかしら……？」

「それはそれで……いいわね」

「中学時代の交友関係を洗って！すぐにね！明後日までには裏付けとって！」

二番目の奴。俺はホモじゃあねぇぞ。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、霧島くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

いや、校舎から寮まで五十メートルしかない道のりを、どうやって

道草をくえというのですか。
まあ確かに各種部活動、ＩＳアリーナ、ＩＳ整備室、ＩＳ開発室などいろんな施設・設備があるＩＳ学園だが、近いうちに見て回りたいけど、今日は荷物の片付けをしなければならない。

「「ふー……」」

千冬さんと山田先生が教室から出て行くのを見送って、俺たちはため息混じりに立ち上がった。また向こうはあれこれ騒がしいが、今日のところは無視して部屋に行くのが得策だろう。

「んじゃ、行くか」

「おう」

今俺と一夏は割り振られた部屋の前にいる。一夏は１０２５室で俺の隣だった。
鍵を開けて、部屋に入ると、大きめのベッドが二つ並んでいる。
とりあえず荷物を片付け始めた。
途中なにかを突き出した音が聞こえた。

「眠い。……寝よ」

荷物を片付け、シャワーを浴びて眠たくなったから寝ることにした。

3話

「なあ……」

「……」

「なあって、いつまで怒ってるんだよ」

「……怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

にべもない。

ちなみに今は入学式当日の朝八時。一年生寮の食堂。

そこに俺と一夏と箒の三人が同じテーブルで朝食を取っているのだが、まともに会話が成立していない。……なにかしたのか一夏？

「箒、これうまいな」

「……」

無視された。

本当になにかしたのか？

「ねえねえ、彼らが噂の男子だって～」

「なんでも黒髪の男子は千冬お姉さまの弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってＩＳ操縦者かぁ。やっぱり彼も強いのかな？」
そして今日も変わらず、周りでは女子が一定距離を保ちこっちを見ている。
「だから箒――」
「な、名前で呼ぶなっ」
「……篠ノ乃さん」
「……」
名前で呼ぶなと言われて名字で呼んだら、今度はむすっとしてしまった。あいつ、名字嫌い直ってないんだな。まあ、仕方ないか。
「き、霧島くん、隣いいかなっ？」
「ん？」
見ると、朝食のトレーを持った女子三名が、俺の反応を待ちわびるが如く立っていた。
「別にいいよ」
俺がそう言うと声をかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、後ろの女子は小さくガッツポーズをしていた。それと同時に周囲からは何か妙なざわめきが聞こえた。

「ああ～っ、私も早く声をかけておけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

三人組はすでにどう座るか手打ち済みなのか、スムーズに席に着いた。

「霧島くん、織斑くんと比べてそんなに食べないんだね」

「あっ、本当だ。龍、ちゃんと食べないと持たないぞ」

「俺はお前と違って、燃費がいいんだよ」

一夏のメニューは和食セット。ご飯に納豆、鮭の切り身と味噌汁。ついでに浅漬け。俺は紅茶にパンが二枚、おかずが一皿。ちなみに、昔はもっと食べていたが、束さんのところにいたため燃費がよくなった（？）。

「……織斑、霧島、私は先に行くぞ」

「おう」

「また後でな」

さっさと食事を済ませた箒は席を立っていってしまう。

俺と一夏と箒は幼なじみだ。小学一年の時に母さんが『女の子一人くらい守れるようになりなさい』と言われて剣道場に通うようになった。一夏は確か……千冬さんの付き合いだったかなそれから、四年生まで同じクラスだった。

それに最初は仲が良くなかった。まあ、一緒に剣道をしているうち

に仲良くなった……はず。

「霧島くんと織斑くんって、篠ノ乃さんと仲がいいの？」

「織斑くんは同じ部屋って聞いたけど……」

「ああ、まあ、幼なじみだし」

と、一夏が言うと周囲は大いにどよめいた。誰かの『え！？』と言う声が聞こえろほどに。

「んじゃ、一夏。先に行くから」

「おう」

お皿を片付け、先に教室に行った。

「おはようございます。織斑先生」

「おはよう。霧島、織斑を鍛えてくれないか？」

「一夏に専用機が来るのですか？」

「ああ、そうだ。だからだ」

「わかりました」

「頼む」

と言って千冬さんは食堂に行った。一夏に専用機が来るのか。おそ

らく近距離格闘装備がメインの機体になるだろうな。となると、練習相手は箒が適任だな。今日のうちに箒に頼んでみるか。

三時間目が終了して一夏の様子を見てみたが、辛うじてついてきているような状態だった。

「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの！？」

「え。案外だらしな――」

パアンッ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

ちょうどいいタイミングで千冬さんが来た。

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「？？？」

一夏がちんぷんかんぷんでいると、教室中がざわめいた。

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……」

「ああ～いいなぁ……。私も早く専用機欲しいなぁ」

まったく意味がわかりませんって顔をしている一夏が見るに堪えかねた感じで千冬さんがため息混じりにつぶやく。

「霧島。教科書六ページの内容を言ってみろ」

「はい。『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているＩＳですが、その中心たるコアを作る技術た一切開示されていません。現在世界中にあるＩＳ４６７機、そのすべてのコアは篠ノ乃博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外コアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』」

教科書の内容はすべて暗記したからこの程度は楽勝だ。言い終わった後、後ろから『おお』とか言っていた。

「ほう。行っていたのは事実のようだな。そういうことだ。本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的に専用

機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

本当に理解できているのか、不安なのだが。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

いいんですか！？個人情報ですよ！

「えええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ＩＳの操縦教えてよっ」

授業中なのに、箒の元にわらわらと女子が集まる。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。教室中の女子が何が起こったのかわからない様子だった。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って、箒は窓の方に顔を向けてしまう。女子は盛り上がったところに冷水を浴びせられた気分のようで、それぞれ困惑や不快を顔にして席に戻った。
そういえば、束さんの話を振ると、いつもそこで会話が終わるんだったっけ。

「さて、授業をはじめるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

山田先生も箒が気になる様子だったが、そこはプロの教師。ちゃんと授業をはじめた。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

うわっ。また来たよこいつ。

「まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアではありませんものね」

「？なんで？」

「一夏。こいつは現時点で専用機を持っているんだ」

「へー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思っただけだけど。どうすげーのかはわからないが」

「それを一般的に馬鹿にしていると言うでしょう！？」

ババン！両手で机を叩いた。……うるさい。こいつといると面倒だから俺は先に学食に行った。

「箒」

「……なんだ」

「一夏の練習相手になってやってくれ」

先に学食に行って、昼食を取っていると一夏と箒が来たので、箒に頼みごとをした。

「どうしてだ」

「一夏に専用機が与えられるってのは、知っているな？」

こくん。とうなずいた。

「俺の予想では、一夏の機体は近距離格闘装備がメインになるはずだ。だから」

「私に剣の相手になれと」

理解が早くて助かる。

「そう。それと――」

箒の近くでささやいた。

「一夏と二人きりになれる口実になるだろ」

「っ！？わ、わかった。それとお前も来い」

「……わかった」

「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても……」

時間は放課後、場所は剣道場。今もまたギャラリーは満載で、一夏は箒に怒られていた。

手合わせを開始してから十分。一夏の一本負け。面具を外した箒の目尻はつり上がっている。

「どうしてここまで弱くなっている！？」

「受験勉強していたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

一夏のことだ。何かあってのことだろう。

「――なおす」

「はい？」

「鍛え直す！これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる！」

「え。それはちょっと長いような」

「うるさい！文句を言うな！次は龍だ！」

次は俺か。まあ、一夏みたいに惨めに負けないようにしないとな。

「行くぞ」

「来い」

そして、俺対箒の試合が始まった。

「……俺の勝ちだ」

「くっ」

手合わせを開始してから十五分。結果は箒の一本負けだった。

「俺は先に帰らせてもらう」

そう言って俺は更衣室に行った。

◇

（すこしきつく言い過ぎただろうか……）

剣道場の更衣室で着替えをしながら、箒はさっきからずっと同じことを考えていた。

六年ぶりに再開した幼なじみ。一夏は変わってない子供の部分と変わった大人の部分、その両方をかいま見て、いつしか胸は早鐘を打っていた。そして龍は変わった。瞳は時々冷徹な目になる。特に変

わったのは太刀筋だった。太刀筋は己を映す鏡。龍の太刀筋は『憎しみ』が映っていた。

（過去のことは、龍が言いたくなった時に聞けばいい。問題は一夏だ）

俗に、剣の道は三日欠かせば七日失うという。今の一夏がまさにそれだった。

（とにかく、明日から放課後は特訓だ。せめて人並み程度に使えるようになってもらわなくては困る）

何が困るのか、どこくらいが『人並み程度』なのか、あまり自分でも整理がついていないようだたが、箒は腕組みをしてうんうんと頷いた。

（それに――）

それに、放課後に一夏と二人きりになれる口実が出来た。

「いや！そ、そのようなことは考えてはないぞ！」

そう、そうだとも。何も不埒なことはない。下心などあるはずもない。私は純粋に、同門の不出来を嘆いているだけだ。そして同門ゆえに面倒を見てやる。何もおかしなところはない！

「故に正当だ！」

だだっ広い更衣室で一人、握り拳を作って声を荒げる箒だった。

4話

◇

翌週、月曜。オルコットとの対決の日。
この前の日に、くじ引きで初戦は一夏対オルコット。次の試合は初戦の勝者対俺という組み合わせになった。そして今は初戦がはじまる直前なのだが。

「専用機が来てないんだよなぁ」

そう、まだ一夏の専用機が来ていないのだ。

「「「……」」」

俺と一夏と箒、沈黙。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってきたのはおなじみ副担任の山田先生だった。
今日はいつもよりさらに輪をかけてあわてふためいている。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す～～は～～、す～～は～～」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

あいつ、怒られるな。

「……」

「ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

先生。冗談だって気付きましょうよ。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パァンッ！いつもと同じく、出席簿アタックが一夏に炸裂した。

「千冬姉……」

パァンッ！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

「そ、そ、それでですねっ！来ました！織斑くんの専用ＩＳ」

やっと来たようだな。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」

「え？え？なん……」

「「「早く！」」」

山田先生、千冬さん、箒の声が重なった。
ごごんっ、と鈍い音がして、ピット搬入口が開く。

――そこに、『白』が、いた。

「霧島。時間になったら呼ぶ。部屋に戻れ」

なるほど、相手の手の内を見せないためか。

「わかりました。一夏」

「なんだ？」

「模擬戦だと思うな。実戦だと思い戦えば、勝機はあるだろう」

「わかった」

一夏の返事を聞いて、俺は部屋に戻った。

――♪♪

「うんっ……はい……」

「私だ。時間だ。すぐにアリーナに来い」

「……了解」

俺は起きて、顔を洗い第三アリーナに向かった。

一夏対オルコットの試合は一夏の負けで終わったらしい。どうも、武器の特性を考えずに使ったから負けたらしい。まあ、どうでもいい。俺はただ『敵』を倒すだけだ。

「龍。行って来い」

「了解。刈り殺せ、ホワイト　デスサイズヘル」

全身が光に包まれ、アーマーが構築された。それを見た箒は「白き死神」とつぶやいた。

「一夏、箒、千冬さん。後で話がある」

「「おう」」

「わかった」

そして俺は敵のもとへ向かった。

「白き……死神」

昨日までの鬱陶しさがなくなっていた。さっきの試合でなにかを得たのか？

「行くぞ、オルコット。俺を殺す気できやがれ！」

「わかっていますわ！」

キュインッ！耳をつんざくような独特の音と、同時に走った閃光をかわす。

「踊りなさい。わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

「俺のテンポについてこれるならな！」

弾雨のごとき攻撃を俺は、かわすかバスターシールドで防ぎ、距離を縮めていく。

「この動き。あなた本当に第二世代なんですの！？」

確かに、デスサイズのスペックは第二世代を超えている。観客席の

女子も『あれ、本当に第二世代？』って言っていた。

「ただの第二世代だとおもうな！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で間合いを詰めて、ビームシザースで斬りかかる。

「くっ。ブルー・ティアーズ！」

ブルー・ティアーズから四機のビットが射出されオールレンジ攻撃を行う。親切なことに、死角からしか狙ってこないことと、フェイントがないおかげで、避けるのが容易い。

「おらよっ！」

一機目のビットを破壊して、ビームシザースのバーニアを吹かし二機目のビットも破壊した。

「そこですわ！」

オルコットが二機目のビットを破壊したと同時に、撃ってきた。

「甘い」

俺はアクティブクロークを閉じて、ビームを打ち消した。

「なっ！？」

「ぼさっとするな！」

ぼさっとしているオルコットに接近して、ビームシザースを振り下

ろす。

「きゃっ！」

さっきの一撃があたり追撃をかけるが、残り二機のビットに阻まれる。

「邪魔だぁ！」

三機目と四機目のビットを破壊して、オルコットに接近した。

「――かかりましたわ」

ヴンッ――。

オルコットの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく、ブルー・ティアーズは六機あってよ」

五機目と六機目のビットからミサイルが発射された。

「だから？」

「え？」

俺は迫り来るミサイルを切り裂き、爆発して爆煙にまぎれた。

「やりましたの！？」

煙が晴れるが――

「いない！？」

そこに俺の姿はなかった。

「どこにいますの！？」

オルコットや観客席の女子も俺を探している。俺は今ハイパージャマーで姿を隠している。ちなみに俺はオルコットの真後ろにいる。

「ビームシザース『零落白夜モード』」

「！？」

俺の声で気づき、後ろに振り向くがもう遅い。

「ぜらあああああっ！！！！」

ビームシザース『零落白夜モード』を振り下ろした。

「きゃっ！！」

この一撃が直撃して、体勢を崩しオルコットが落ちるがギリギリで立て直す。ブザーが鳴っていないからまだ試合は続いている。

「お前にデスサイズの本気を見せてやる。デスサイズ、タイマーを一分でセット。Ｄ（デストロイ）ーＳｙｓｔｅｍ起動」

突然、機体が赤く発光して、ビームシザースの刃が大きくなった。

「円舞曲（ワルツ）は終わりだ。ここからは終焉の鎮魂曲（レクイエム）だ！」

「は、速い！？」

一瞬で十メートル離れていた距離を詰めて、ビームシザースで切り裂くが、ギリギリで『スターライトＭｋ？』を盾にして防ぐが、『スターライトＭｋ？』が破壊された。

「くっ」

「速く武器を展開しろ！」

「わかっていますわ！」

新たに武器を展開するが一向に構成さらずにいた。

「まだか？」

「――ああ、もうっ！《インターセプター》！」

半ばヤケクソニ気味に武器の名前を呼び、近接用の武器を展開した。

「遅い、実践だと死んでいるぞ！」

「わ、わかっていますわ！」

「そうか。行くぞ」

俺が身構えると、オルコットも身構える。そして、オルコットに接近して斬りかかる。

「っ！」

とっさの判断で一撃目を防ぐが、二撃目に近接用武器を弾き飛ばし、三撃目に五機目と六機目のビットを破壊して、四撃目でオルコットを斬り、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者――霧島龍』

「ぐっ！」

タイマーが切れてＤ－Ｓｙｓｔｅｍが解除され、システムの負担がきて激痛がはしる。

「だっ、大丈夫ですの！？」

「大丈夫だ……ピットに戻る……」

「おい、大丈夫なのか！？」

「大丈夫だから、静かにしろ一夏」

ピットに戻って、一夏がうるさかった。まあ、心配しているのはわかるが暑苦しい。

「さて、話そうか。五年前のことを」

「「「……」」」

全員が真剣な眼差しで、俺を見る。

「五年前の夏休み。ある場所で元軍人によるテロがあったのは知っているな？」

「ああ」

「知っているが」

「それがどうしたのだ」

「その日、両親が巻き込まれて殺された」

全員同情してくれるようだ。

「テロリストはどうなったか知っているか？」

「ああ、結果捕まってそいつらは『死神が出た』とか言っていたな」

「その死神はたぶん俺だ」

「「「は？」」」

意味わからんって顔しているな。まあ、当たり前か。

「生き残った俺はそいつらを見つけ、殴りに行った。そこから先は

記憶がない。目が覚めたら、そいつらと一緒に倒れていた」

「「「……」」」

「目が覚めて俺は束さんにばったり会った。行くあてのない俺を拾ってくれてな。それから二年後だ。俺はＩＳを動かした」

「ということは、龍が」

「世界初のＩＳ操縦者ということか？」

「そういうとこだ」

「「えええええっ！！」」

ピットに二人の声が響き渡った。

「んで、俺はテロリスト共をひたすら、ぼこり続けた結果。『白き死神』って呼ばれるようになったってことだ……さて、これで話は終わりだ」

と言って俺は更衣室に行こうとした。

5話

翌日……。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいいですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がっている。暗い顔をしているのは一夏だけだった。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは――」

「俺が辞退したからだ」

あ。一夏の思考が停止した。

「なんで……？」

あ。思考が回復したようだな。

「いや、ただ一夏はＩＳ初心者って言うことでクラス対抗戦で経験をつんで強くなってほしいからだ」

「……で、本音は」

「ただ、クラス代表になるのが面倒だからだ」

「くそったれがあああああ！！！！！」

突然声を荒げて右手で殴ってきた。

「あぶねえだろうが」

俺はそれを右手で受け止める。

「うるせえ！一発殴らせろ！」

「諦め悪いぞ一夏」

俺は一夏のこぶしを握る。

「あ、いた、痛い。ギブ、ギブギブギブ」

これ以上やると一夏がかわいそうなので手を離した。

「つぅ。だったら、俺に直接勝ったセシリアがクラス代表じゃ？」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたんと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。好きだよな、そのポーズ。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

まあ、事実だし反論できないよな。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして“一夏さん”にクラス代表を譲る事にしましたわ。やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

「と言うことだ。諦めろ一夏」

「こんちくしょおおお！！！」

こうして、朝のＳＨＲは一夏の叫びで終わった。

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部がなくなった頃。俺は今日もこうして鬼教官の授業を真面目に受けていた

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、霧島。試しに飛んでみせろ」

俺とオルコットはすぐに展開した。約〇・七秒の展開時間にアクティブクロークを展開した状態でアーマーを形成された。

「白き死神」

「すごい」

「はじめて間近で見た」

デスサイズを見た女子数人が声を漏らした。その間も一夏は一向に展開されない。

ＩＳは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。オルコットは左耳のイヤーカフス。俺は右耳の白い十字架のピアス。一夏は右腕のガンレット。ガンレットってアクセサリーじゃなくて、防具だよな。

「よし、飛べ」

言われて、オルコットと同時に急上昇し、上空で静止した。

一夏も遅れて後に続くが、俺とオルコットよりかなり遅いものだった。

「何をやっている。スペック上の出力ではブルー・ティアーズより上、デスサイズと同等だぞ」

通信回線から早速おしかりの言葉を受けたようだ。ちなみに急上昇、急降下は昨日習ったばかりだ。

「一夏、ようわ慣れろってことだ」

「龍さんの言うとおりですわ。イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法模索する方が建設的でしてよ」

「そう言われてもなぁ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「一夏、お前はやめておけ」

「ああ、そうだな」

まず、一夏の頭では理解できないだろうな。

「そう、残念ですわ。ふふっ」

楽しそうに微笑むオルコット。その表情は嫌味でも皮肉でもなく、本当に単純に楽しいという笑顔だった。

「一夏っ！いつまでそんな所にいる！早く降りてこい！」

いきなり通信回線に箒の怒鳴り声が響き、下を見ると箒が真耶のインカムを奪っていた。後ろで真耶がおたおたしていた。

「織斑、オルコット、霧島、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。ではお先に」

言って、すぐさまオルコットは地上に向かう。ぐんぐんと小さくなっていく姿を、眺めた。

「うまいもんだなぁ」

「代表候補生だからな。これくらいはたやすいだろう」

完全停止も難なくクリアーしたようだ。

「一夏、次は俺が行く」

一気に急降下、地表に一センチのところで、完全停止をした。

「さすがだな『白き死神』」

「どうも」

俺が白き死神ということがわかり、昨日から質問攻めにあった。

続いて一夏なのだだ……

ギュンッ――――――――ズドォォンッ！！！

結果。地上には着いた。ただし専門用語で墜落と言うものだ。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グランドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「よし。ははじめろ」

言われて、一夏は横を向き正面に人がいないことを確認してから、再度突き出した右腕を左手で握る。
手のひらから光が放出され、そしてそれが像を結び、形として成立する。
光が完全に収まった頃には、一夏の手には《雪片弐型》が握られていた。

（昨日より〇・二秒上がったな）

「遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

まあ、実際には遅い。実戦では大きな隙なってしまう。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。一夏とは違い、一瞬爆発的に光っただけでその手には狙撃銃《スターライトｍｋ？》が握られていた。
一夏より圧倒的に速い。しかも、銃器にはすでにマガジンが接続されていて、オルコットが視線を送るだけでセーフティーが外れる。
一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。

「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だだ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。いいな」

「――、……はい」

反論の余地は大いにあるような顔をしていたが、そこは千冬さん、一睨みで話が終わる。いい兵士が生まれそうだな。

「霧島、手本を見せてやれ」

「了解」

言われて俺は右手を正面に突き出し、一瞬だけ光りその手にはビームシザースが握られていた。

「さすがだな。織斑、セシリア。いいか、これが正しい展開だ。つぎ。セシリア、近接用の武器を展開しろ」

「え？あ、はい」

スターライトｍｋ？を光りの粒子に変換、そして新たに近接用の武装を展開するが、手の中の光はくるくると空中をさまよっている。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もうっ！《インターセプター》！」

武装の名前を半ばヤケクソ気味に呼び、武器として構成された。
しかし、この展開方法は教科書の頭の方に書かれている、いわゆる『初心者用』である。

（前より〇・三秒上がったな）

「……何秒かかっているんだお前は？　実戦では良い的だぞ」

「じ、実戦では相手を近距離の間合いに入らせないので、問題ありませんわ！」

「ほう。霧島はともかく、織斑との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

何やらごにょごにょ言っているが、千冬さんの言うことが正論のため何も言い返せない。
その原因である一夏はと言うと、少しだけ申し訳なさそうな顔をしていた。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グランドを片付けておけよ」

それを聞いた瞬間俺は即座に更衣室に行った。

◇

「ふうん、ここがそうなんだ……」

ＩＳ学園ゲート前。小柄な身体の少女が、その身に似つかわしくない大きなボストンバックを肩から提げて立っていた。左右それぞれに高い位置で結んでいる髪を夜風に揺らせながら、少女はくしゃくしゃの紙を上着のポケットから取りだす。

「本校舎一階総合事務受付……どこにあんのよ？」

ぶつくさ言いながら、取り敢ず少女は足を動かす。

ここで悶々悩んでいるよりも自分で探した方が速いと判断したのだ。

結果、

「もっと迷っちゃった……」

宛てもなく歩き回っている内に本気で迷子になってしまった少女。

キョロキョロと周囲を見回してみるが、一度も来たことがない場所なので目印など見つからない。

「はぁ……。ま、いっか。こんだけ奥に来れば誰か一人くらい通り過ぎるでしょ。その時案内してもらお」

少女はボストンバックを床の上に置き、その上にちょこんと腰を下ろした。

――元気かな、アイツ。
ふと、そんな考えが胸中を過ぎった。
あいつとは、世界初の男性ＩＳ操縦者として全世界に報道された黒髪の青年のことである。
「そこでなにをしている」
突然後ろから声をかけられ振り向いた。
――龍、なの？
「聞いているのか」
「えっ？あ、ええと、本校舎一階総合事務受付ってところに案内して」
「了解した。ついてこい」
そして少女は少年についていった。
「ここだ」
「あ、ありがとう。そういえばまだ名前も言ってなかったわね。私

の名前は凰鈴音、あなたは？」

「霧島龍だ」

「え？」

振り返ったときにはもう、龍の姿はなかった。

「ええと、これで手続きは全て終了です。ＩＳ学園へようこそ、鳳（ファン・リンイン）鈴音さん」

少女――鈴音は受付嬢の笑みを無視し、受付に身を乗り出すように身体を乗せた。

「あの、織斑一夏って何組ですか？」

「あぁ、あの噂の子？　一組ね。鳳さんは二組だからお隣さんね。そう言えば、あの子一組のクラス代表になったらしいわね。それにあの『白き死神』も同じクラスですって」

そんな噂に興味はない、とでも言いたげな表情で鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って決まってるんですか？」

「決まってるけど……聞いてどうするつもり？」

受付嬢の問いかけに鈴音は薄い笑みを浮かべた。
「お願いしようと思って。代表を譲ってって……」

◇

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」
「おめでと～！」
ぱん、ぱんはーん。とクラッカーが乱射される。
今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員そろっていた。各自飲み物を片手にやいのやいのと盛り上がっているのだが……
「……」
ここに盛り上がってない少年がいた。
壁にはデカデカと『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙がかけてあった。
「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」
「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

あれ？さっきから相づちを打っている女子って二組だよな。というか、明らか三十人以上いるぞ。

「あっ。ケーキだ」

ケーキを見つけ、すぐさまケーキがあるところに行く。そのときのスピードは瞬時加速に匹敵するという。（一夏談）

「霧島くんって、甘い物好きなんだ」

「ん？うん。好きだよ。自分でも作ってるし」

「ええっ！！霧島くんってスイーツ作れるの！？」

「霧島くんが作れるスイーツ食べてみたいな～」

「機会があれば作るよ」

そうして俺はケーキを食べはじめた。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と霧島龍君に特別インタビューをしに来ました～！」

オーと一同盛り上がる。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。

はいこれ名刺」

受け取って、名前を見たがかなり画数多いな。書くの面倒だな。

「ではではずばり織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと……まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。俺に触れるとヤケドするぜ、とか！」

ずいぶん前時代的な台詞だな。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

いや、あんたも前時代的だから。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

いいのかよ。捏造して。

「んじゃ、次霧島君！何か一言、どうぞ！」

「えーと、じゃあ。次の生徒会長は俺がなる。でいいですか？」

「おお、まさかの宣戦布告！これは捏造しなくてよさそうね」

あ、これはしないんだ。できればしてほしかったけど。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」
「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないでしわね」
とかなんか言っときながら、めちゃくちゃ期待してただろ。
コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表、副代表を辞退したかというと、それはつまり――」
「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」
「さ、最後まで聞きなさい！」
「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」
「なっ、な、ななっ……！？」
先輩はニヤニヤしながらそう言うとオルコットは一気に赤面した。だが、一夏はそれをオルコットは怒ったのだと思って助け舟を出すことにした。
「何を馬鹿なことを」
「え、そうかなー？」
「そ、そうですわ！何をもって馬鹿としているのかしら！？」
助け舟を出したつもりが逆に怒られた一夏はなぜ怒られたのか分か

らず首を傾げる。

「だ、大体あなたは――」

「はいはい、とりあえず三人並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

オルコットは意外そうな声を上げるのだが、その声には喜色を含んでいた。

「注目の専用機持ちだからねー。スリーショットもらうよ。はいはい並んで並んで」

並び方は一夏を中心に右に俺。左にオルコットが立っている。

「……」

「？　なんだよ？」

「べ、別に、何でもありませんわ」

相変わらずだな。一夏は。

「……」

「なんだよ、箒」

「何でもない」

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

「え？えっと……２」

「違う、７４．３７５だ」

「霧島君。正解」

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。……って、スゴ。

「なんで全員入ってるんだ？」

恐るべき行動力をもって、一組の全メンバーが撮影の瞬間に俺たちの周りに集結していた。ちなみに、箒は一夏の隣にいる。箒が来るのはわかっていたから、場所を譲った。

「あ、あなたたちねぇっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

オルコットは文句を言おうとするがクラス全員に丸め込めようとするがオルコットは苦虫をかみつぶしたような顔になる、それをクラ

スメイト達はニヤニヤしながら見ているのであった。

「龍。その……ありがとう」

「気にするな。がんばれよ」

「ああ」

ともあれ、この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いた。

5話（後書き）

感想よろしくお願いします。

6話

「織斑くん、霧島くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

転校生ってことは鈴か。

「転校生？今の時期にか？」

たしかＩＳ学園は、試験はもちろん、国の推薦がないとできないらし。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

（そういえば来月にクラス対抗戦があったな）

クラス対抗戦とは本格的なＩＳの学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためらしい。

ちなみに、一位クラスには優勝賞品が出るらしい。

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「その情報、古いよ」

声が聞こえたところ見ると一人の少女がいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

少女は腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた。
「鈴……？お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、凰　鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
バシンッ！突然鈴に激痛が走った。
「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」
「ち、千冬さん……」
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません……」
そして鈴は教室に戻った。
そのあと千冬さんの出席簿が火を噴いたのは別の話し。

「お前のせいだ！」
「あなたのせいですわ！」
昼休み、開口一番箒とセシリアが一夏に文句を言ってきた。

「なんでだよ……」

この二人、午前中だけで山田先生に五回注意、千冬さんに三回叩かれている。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

そのほかクラスメイトが数名付いてきて、俺たちはぞろぞろと学食に移動した。

「待ってたわよ、一夏！」

どーん、と俺たちの立ちふさがったのは噂の転校生、凰鈴音だった。

「そこをどけ。通行の邪魔だ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

ちなみにその手にはお盆を持って、ラーメンが鎮座している。

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！大体、一夏、アンタを待ってたんでしょうが！なんで早く来ないのよ！」

こいつがうるさいのは昔からだし、とりあえず俺は食券をおばちゃ

んに渡す。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「俺は約五年ぶりだな」

「げ、元気にしてたわよ。一夏こそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

そんな二人の話を聞き流しながら、テーブルについた。

「龍、アンタ五年前になにがあったのよ」

「今ここで話すとメシが不味くなる」

メシ食っているときに、あの話をしたくない。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばかりしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

そういえば一夏は一年ぶりとか言ってたな。ということは去年国に帰ったのか。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

箒とセシリアが多少刺のある声で訊いてくる。他のクラスメイトも、興味津々とばかりに頷いていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

「……」

「？何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

相変わらずだな。一夏は。

「幼なじみ……？」

怪訝そうな声で聞き返したのは箒だった。

「箒が引っ越したのは小四の終わりで、鈴転校してきたのは小五の頭だから、入れ違いだ」

と言って俺は昼食を食べ終わり、学食を出て行った。

その後と、夜に何があったかは知らない。

――翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は、『クラス対抗戦日程表』。

一回戦の相手は――鈴だった。

7話

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴。
噂の新入生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。

「……」

「龍、どうかしたか？」

「いや、なぜか朝から嫌な予感がするが気のせいだろう」

試合がはじまり、二人は動き出す。
現状は『甲龍』の『衝撃砲』に苦戦している。

「不可視の砲弾にほぼ制限なしの砲身か。つらいな」

けど一夏には『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』という切り札がある。出しどころさえ間違えなければ代表候補生と渡り合える。
けどこの奇襲は一回しか通用しない。だから《雪片弐型》のバリアー無効化を同時に放つ。これが成功しなければ、負けしかない。
そして雪片弐型の刃が届きそうなった瞬間……

ズドオオオンッ！！！

「「「！？」」」

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。
アリーナ中央からはもくもくと煙が上がり、アリーナの遮断シール

ドを貫通して入ってきた。
敵は三機。その内の二機は……
「ウイング型（モデル）……チッ」
俺はすぐに観察室に向かった。

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！？」
ＩＳのプライベート・チャンネルは声に出す必要は全くないのだが、そんなことを失念するくらい山田先生は焦っていた。
「先生！俺に出撃許可を！」
「そうしたいところだが、――これを見ろ」
ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。その数値はこの第二アリーナのステータスチェックだった。
「遮断シールドがレベル４に設定。扉すべてがロック――対策は？」
「現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ」
「間に合わない……山田先生、そこを譲ってください」

「え？」

突然のことに、山田先生は驚くが今はかまっていられない。

「霧島。何をするきだ？」

「ここで直接アリーナのシステムをクラックします。外部からのクラックじゃ、時間がかかる」

俺は空中投影のキーボードを呼び出し、システムクラックをはじめる。

「一夏、鈴、聞こえるか？」

『聞こえてる』

『なによ』

「今システムクラックを実行している。灰色のやつはともかく、白い二機の攻撃は絶対に直撃するな。いいな」

『おう』

『わかったわ』

そしてそのままシステムクラックを続ける。しかし予想よりもガードが堅い。

「霧島。あとどのくらいだ」

「あと少し。よし、行けた。織斑先生。今から三分後に全ロックがはずれます。生徒の避難誘導をおねがいします。俺はあの三機を仕留めます」

「了解した。敵はできれば捕獲しろ」

「了解」

そして俺はピットに向かって走り出した。

「二人とも無事か？」

「ああ、大丈夫だ」

「私もよ」

二人の機体を見ても、あまり外傷はないみたいだ。

「よし、二人ともピットに戻れ」

「わかった。行くぞ鈴」

「え？　あ、う、うん…分かった」

「龍……負けるなよ」

「死神はそう簡単に死なねえよ。さっさと行け」

一夏と鈴はピットに戻った。さてと、三機とも無人機ってことはわかっている。ウイング型（モデル）は完全破壊して、黒いのは半壊にすればいいだろう。

「刈るぜデスサイズ」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で灰色のＩＳとの間合いを詰め、ビースシザース『零落白夜モード』で両足を切り落とす。

――警告！後方の敵ＩＳの射撃来ます――

とデスサイズのハイパーセンサーが告げる。後方を見るとウイング型一機がバスターライフルを構えて、銃口を俺に向けていた。

「甘い」

俺はアクティブクロークを閉じて、ビームを打ち消したと同時にもう一機のウイング型がビームサーベルで斬りかかる。

「遅い」

アクティブクロークを開き、斬撃避けてビームシザース『零落白夜モード』で右腕を切り落とす。次に灰色のＩＳが射撃を撃つが、それを軽やかにかわしていく。

（クロークは後二回が限界か）

――警告！右の敵ＩＳの射撃来ます――

とハイパーセンサーが告げると同時に、右から右腕のないウイング型がバスターライフルを撃ち、次に正面の灰色のＩＳがビームを撃つ。

「くそっ」

俺はそれをギリギリでかわし、なんを逃れる。が――

――警告！後方の敵ＩＳの射撃来ます――

「なっ」

さっきの射撃はこの位置に追いやるためのだったのか。そして、後方にいるウイング型はバスターライフルを撃ち、灰色のＩＳも同時に撃つ。

（くそっ、避けきれない）

俺はアクティブクロークで防ぐが――

――フィールドジェネレーターの許容範囲を超えました。アクティブクローク強制解除します――

さっきの攻撃は防げたが、アクティブクロークが使えなくなった。

「チッ、デスサイズ、タイマーを三分でセット。Ｄ（デストロイ）ーＳｙｓｔｅｍ起動」

機体が赤く発光して、ビームシザースの刃が大きくなった。

「奏でろ。終焉の鎮魂曲（レクイエム）。ビームシザース『零落白夜モード』」

瞬時加速で右腕のないウイング型との間合いを詰めて、機体とバスターライフルをばらばらに切り裂く。

「次は……お前だ」

もう一機のウイング型が二本のビームサーベルを持って、突っ込んできた。

「遅い」

最初の突きをかわし、これもばらばらに切り裂く。

「お前で最後だ」

――残り、一分――

「ぜらあああ！！！」

灰色のＩＳの右腕を切り落とし壁に向けて蹴り飛ばした。

「ぐっ、ああああ」

制限時間に到達して突然激痛が走った。

「敵機沈黙を……確認。任務完り――」

――敵ＩＳの再起動を確認！警告！ロックされています！

「！？」

残った左腕。それを、さらに最大出力形態（バースト・モード）に変形させたＩＳが地上から俺を狙っていた。

次の瞬間、迫り来るビーム。俺は、ためらいもなく光の中へと飛び込む。

真っ白な視界の中、刃が装甲を切り裂く手応えを感じた――。

「う……？」

全身の痛みに呼び起こされ、俺は目を覚ました。

周囲を見回すと、どうやら保健室らしい。

「気がついたか」

シャッとカーテンが引かれる。そこには千冬さんがいた。

「体に致命的な損傷はないが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ慣れろ」

「はい……」

まだぼーっとする。なんとなく視線をやった窓の外はもうあかね色に変わっていた。今は放課後のようだ。

「霧島。あの白い二機がなんなのか知っているな」

「はい。あれはウイング型と言って、亡国機業が作った擬似コア搭載型の無人機です」

「擬似コア？」

「束さんが作ったコアは完全なブラックボックスですが、擬似コアはただＩＳを動かすだけです。普通のＩＳと違うのは大量のシールドエネルギーを持っていることと、絶対防御がない代わりにスペックが異常なところです」

まあ、奴らが作る擬似コアは自らエネルギーを生産できない。けど俺は奴らよりも高性能のコアを作ることができるがな。

「龍。あのシステムはなんだ？」

千冬さんが突然、俺にＤ－Ｓｙｓｔｅｍのことを聴いてきた。しかも霧島では無く下の名を呼んだ、相当真剣なようだ。

「Ｄ－Ｓｙｓｔｅｍと言って、デスサイズの全リミッターを解除するシステムです。今の俺では三分が限界です」

「三分を越えるとどうなる」

「使用時間によりますが、最悪死亡でしょう」

「そうか……では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

それだけ言い残すと、千冬さんはすたすたと保健室を出て行った。

「龍、起きてる？」

千冬さんと入れ違いに誰かが入ってきたようだ。……というか、声からして間違いなく鈴だ。

「なんだ？」

「一夏に五年前のこと聞いたわ」

「そうか」

俺が寝ている間に話したのか。まあ、手間が省けていいがな。

「その……ごめん」

「気にするな。それと頑張れよ」

「うん」

そう言って鈴は保健室を出て行った。

「俺も部屋に戻るか」

ベッドから降りて、部屋に戻る。今日は打撲のせいで、いつもより時間がかかった。

8話

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」

「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じじゃない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的にみてミューレイのがいいかなぁ。特にスムーモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子がわいわいと賑やかに談笑をしていた。みんな手にカタログを持って、あれやこれやと意見交換している。

「そういえば織斑君と霧島君のＩＳスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど」

「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリット社のストレートアームモデルって聞いてる。龍は？」

「俺か？俺も一夏と同じモデルだ」

嘘だけどな。俺のスーツは束さんが作ったスーツだ。

「諸君、おはよう」

「「「お、おはようございます！」」」

それまでざわざわとしていた教室が一瞬で静かになった。一組担任織斑千冬先生と山田真耶先生の登場だ。

「今日から本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＡスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろ」

いや構うだろ！と、俺と一夏以外もこのクラスの女子は心の中だ突っ込んだだろう。男が居るんだぞ。ここに二人。下着はまずいだろ。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬さんが山田先生にバトンタッチする。ちょうど眼鏡を拭いていたらしく、慌ててかけ直す姿がわたわたとしている子犬のようだった。

「ええとですね。今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「え……」

「「「「「ええええっ！？」」」」」

いきなりの転校生紹介にクラス中がいっきにざわつく。

（普通分散するだろ）

そんなことを考えていたら、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわつきがぴたりと止まる。

なぜなら、そのうちの一人が――男子だからだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

「お、男……？」

誰かがつぶやいた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

「きゃ……」

「はい？」

「「「「きゃあああああーーーー」」」」

突如、黄色い声が教室に響いた。
「男子！三人目の男子！」
「しかもうちのクラス！」
「美形！守ってあげたくなる系の！」
「地球に生まれて良かった～～～～！」
相変わらずやかましい……。
「あー、騒ぐな。静かにしろ」
面倒くさそうに千冬さんがぼやく。
「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」
続いて二人目の転校生なのだが……
「……」
口を開かず、腕組みをした状態で下らなそうに見ていた。
「……挨拶をしろ、ラウラ」
「はい、教官」
素直に返事をし、千冬さんに敬礼をした。教官ってことはドイツの

奴か。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そしてラウラはぴっと伸ばした手を体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋を伸ばしている。
どうみても軍人だろと思わせる感じだった。
そして挨拶をした。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

クラスメイトたちの沈黙。
そして自己紹介をした後口を閉ざしてしまった。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、返ってきたのは無慈悲な即答になきそうになった。可哀そうに。

「！貴様が――」

ラウラと一夏の目があい、一夏の前の立つ。

バシッ！

「何の真似だ？」

ラウラは一夏の頬を叩く寸前に、平手を押さえた俺を睨んだ。

「初対面相手に平手を食らわすのが、ドイツの挨拶か？」

「……」

俺が掴んでいる逆の手で、ナイフを出し俺を斬ろうとする。

「やめておけ。死ぬぞ」

ラウラが俺を斬ろうとするよりも速く、ラウラの首にナイフを当てる。

「貴様。何者だ？」

「霧島龍。専用機はホワイト　デスサイズヘルだ」

「あー……ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グランドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

そしてＨＲが終わった。

「おい織斑、霧島。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

やっぱりそうなるよな。

「君たちが織斑君と霧島君？初めまして。僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから。龍」

「おう」

俺はシャルルの手を取るとそのまま教室を出た。

「とりあえず男子は空いているアリーナ更衣室で着替える。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

とりあえず階段を下りて一階へ。速度を落とさず進む。

「ああっ！転校生発見！」

「しかも織斑君と霧島君と一緒！」

早速学年各クラスから情報先取のため尖兵が駈けだしてきている。捕まったらあとが面倒だな。

「いたっ！こっちよ！」

「者ども出会えい出会えい！」

おいおい何かホラ貝が聞こえた気がするぞ！

「織斑君の黒髪と霧島君の白髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「きゃああっ！見て見て！ふたり！手！手繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

おい。毎年ちゃんとしたプレゼントしろよ。

「な、なに？何でみんな騒いでいるの？」

状況が飲み込めないのか、シャルルは困惑顔で聞いてくる。

「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」

「……？」

なぜ「意味がわからない」と言う顔をするんだ？

「ただ男がＩＳを使えるのが珍しいからだろ。男でＩＳを動かせるのって、今のところ俺たちだけだからな」

「あっ！――――ああ、うん。そうだね」

「それとアレだ。この学園の女子って男子と極端に接触が少ないから、ウーパールーパー状態なんだよ」

「ウー……何？」

「二〇世紀の珍獣。昔日本で流行ったんだと」

「ふうん」

「ま、何にしてもこれからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「霧島龍。龍でいい」

「うん。よろしく一夏、龍。僕のこともシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル」

そしてどうにか群衆に捕まる前に校舎を出ることできた。

「よーし、到着！」

ドアが斜めにスライドして開き、第二アリーナ更衣室に無事到着した。

「うわ！時間ヤバイナ！すぐに着替えちまおうぜ」

一夏は、制服のボタンを一気に外し、Tシャツを脱ぎ捨てた。

「わあっ！？」

叫んだのはシャルルだった。

「？」

「荷物でも忘れたのか？って、なんで着替えないんだ？早く着替えないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあ時間にうるさい人で――」

「う、うんっ？着替えるよ？でも、その、、あっち向いてて……ね？二人共」

「？？？いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はねぇけど……って、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない！別に見てないよ！？」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるシャルル。

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならないーというか、あの人はシャレにしてくれんぞ」

まあ、確かに千冬さんは時間にうるさいからな。

「……」

何か視線を感じるんだが。

「シャルル？」

「な、何かな！」

気になって視線を向けると、シャルルはこっちにちょっと向けていた顔を慌てて壁の方にやって、ＩＳスーツのジッパーをあげた。

そして一夏が聞く。

「うわ、シャルルも龍も着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

「お前が遅いだけだ」

「い、いや別に……って一夏まだ着ていないの？」

一夏は、ズボンと下着を脱いでＩＳスーツを腰まで通したところで止まっている。

「これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいだよなぁ。引っかかって」

「ひ、引っかかって？」

「おう」

「……」

何であの時顔を赤くしているのかわからん。

「よっ、と。———よし、行こうぜ」

「う、うん」

「おう」

俺たちは着替え終わって更衣室を出た。

「それにしても、シャルルのスーツ、なんか着やすそうだな。どこのやつ？」

「デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどフルオーダー品」

「デュノア？デュノアってどこかで聞いたような……」

「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいＩＳ関係の企業だと思う」

「へえ！じゃあシャルルって社長のむすこなのか。道理でなあ」

「うん？道理でって」

「いや、なんつうか気品っていうか、いいところの育ち！って感じがするじゃん。納得したわ」

「いいところ……ね」

ふと、シャルルが視線を逸らし、複雑な表情を浮かべている。

「それより一夏と龍の方がすごいよ。あの織斑千冬さんの弟と『白き死神』だなんて」

「すごい、か。急ぐぞ」

「うん？」

「ああ」

再び第二グランドに向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8947u/

ＩＳ‐インフィニット・ストラトス‐ 白き死神

2011年10月2日09時27分発行